

周辺地観光・農村観光・都市観光についての理論動向

——観光の価値創造性の観点からの考察——

大橋 昭一

I. まえがき—観光の価値創造性について

今、観光が世界的に注目を浴びている。それは何よりも、観光が経済活性化の力となるからである。観光は、社会的経済的発展の乗り物 (vehicle) と位置づけられている。

このことが観光において可能であるのは、まず第一に、観光が輸出産業であり、そのもと(資本)となる観光資源について、通常の物品の製造・販売のような大きな初期投資を必要とせず、旧来からの名所・旧跡・自然環境等を資本として活用できるところにあるが、このことは取りも直さず、そうした観光資源が観光客に好まれ、集客力をもつことに由来する。このことはあえて別言すれば、そうした観光資源が観光商品として「売れる」ことである。

こうした観光商品が「売れる」こと、すなわち集客力をもつことの根源には種々なものがあるが、大別すると、次の2者に分けられる。第1は、もともと歴史的、文化的、社会的あるいは学術的に高い価値をもち、それ故それ相当の集客力があって「売れる」ものである。こうしたものは都市や特定の名所に比較的多い。地元住民もその価値を認めているが、必ずしも日常的にそこへ行って観賞したり体験したりするものではない。ツーリズム上は、それよりも、当該資源の所在地以外の住民にとって高い魅力があり、そうした人たちが資源所在地まで行って観賞などの行為をすることが肝要な点である。こうしてツーリズム上の価値が生まれる。

第2は、例えば自然景観のように、当該資源の所在地の人たちには全く日常的にあるものであり、従って地元住民には特別に価値があるものではないが、例えば、他の土地の住民でそこを初めて訪れた人たち、端的には観光客にとっては相当な価値があるものである。こうしたもの(あるいは事例)は観光によって価値が生まれるのであり、観光(客)がなければほとんど価値がないものである。

このことは、根本的にいえば、観光客と地元住民とでは観光資源に対する見る目 (gaze) が異なることに由来する。このこと、すなわち観光客と地元住民とでは観光資源に対する「見る目」が異なることは、本格的には、再帰的近代化論で有名なアーリ (Urry, J.) の所論に始まるが(参照文献w, x)、本稿では、それをさらに発展させ、観光の価値創造性として提起するもので

あり、それは根本的には上記2者の形で成立するものとする。

こうした価値創造性が特に観光において注目されるのは、観光対象物の多くが土地に密着していて、そのものの所在地に行かないと観賞したりすることができないためである。通常の可動的物品では、その物を需要の所在地へもって来ることができるが、観光資源の多くはそれができない。需要(者)の側でその所在地に出向くことが必要になる。こうして観光地としての価値は生まれるが、移動手段等の需要も創り出される。これは観光のシステム性に由来する(観光のシステム性については参考文献αをみられたい)。

こうした価値創造性は、観光資源が「売れる」ことであるから、観光(地)の商品化(commodification)などといわれるが、まず正確にいうと、上記で「売れる」と書いたのは便宜上のことで、通常の意味での「売買」、すなわち所有権の移転というような場合はほとんどない。多くの場合、観光資源は見たり体験するもので、観光客の代価は「使用料」「観賞料」というべきものである。ホテル等でも代価は使用料とサービス(人間労働)への代価であって、通常物品のような売買ではない。ここにサービス業としての観光業の基本的特徴がある(この点について詳しくは参考文献β第1章をみられたい)。

この場合、地元住民と観光客とでは「見る目」が異なり、地元住民にはほとんど無価値であるが、観光客にとって価値があるものの場合、こうした差異がおきるのはそのものに対する評価に違いがあるからであるが、そうしたことがおきるのは日常性の違いであって、地元住民にとってあまりにも日常的なものであるため無価値であるものが、観光(客)によって価値をもつものとなる。この日常性の違いも、本稿で強調したい点である。

ただし、ここで論じ強調しているのは、観光資源の性質や特性ではない。観光資源についてなんらかの(多くは経済上の)力を発揮できるようにするのは、観光(業)であるということである。観光(業)にこうした価値創造性(あるいは価値創造力)があるということである。

以上のように観光から生まれるものを価値(value)という言葉でとらえる試みは、これまでもあった。最近でも、例えば2003年ファイオール(Fyall, A.)らは、ツーリズムのリレーションシップ・マーケティング(端的にはレピーター獲得方策)について、それによりもたらされるものを価値と名づけ、そのコストとの比較・分析を行うことが必要という視点を提示している(i, p. 646)。しかしこの場合の価値は、収益という意味が強く、本稿の問題意識とはレベルが異なる。また、この視点からいっても日常性が高まれば、観光上の価値は下がる。

本稿は、以上のような問題意識にたって周辺地観光、農村観光、都市観光についてこれまでどのような論究がなされてきたかを考察し、観光の価値創造性を解明する手掛かりを得ることを課題とする。まず、周辺地観光から始めたい。

なお、以下本稿では英語でtourismといわれるものをツーリズムあるいは観光と表現していることをお断りしておきたい。また、参考文献は末尾に一括して掲載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

Ⅱ. 周辺地ツーリズム論

ここで周辺（地）というのは、周知の「中枢（core）—周辺（periphery）」の概念（理論）でいうところの周辺（地）である。この場合、周辺（地）とは、さしあたり一般的には、次のようなものをいう（以下は主として参考文献 c, p.102； e, pp.1-2による）。

何よりもまず、周辺（地）は中枢（地）から地理的に周辺にあるものである。中枢から遠距離にあるためもあり、文化的、社会的、経済的など多くの分野・領域で中枢から遅れた状況におかれ、政治的影響力も弱い。そうした結果、人口も周辺から中枢へ流れる傾向があり、地域内では競争的観点が薄くなって、社会活動や経済活動等でも変革的傾向が弱い。そのため、善きにつけ悪しきにつけ、伝統的なものがより多く残存する傾向をもつ。

いうまでもなく、中枢—周辺は相対的概念であり、例えば国際的關係では国（あるいはそれに相当する地域）ごとに中枢—周辺の関係があるが、一国（あるいは一地域）内においても中枢—周辺の関係があり、さらに、一国内地域（例えば府県や市町村）内でも中枢—周辺の関係がある。細かいいえば一つの村落でも同様な関係がある。中枢—周辺の関係はこのように階層的構造をなし、わが国で僻地といわれる場所はこうした多重的な中枢—周辺の関係のもとにある周辺地ということができる。

翻って、ツーリズムにおいて国際的に中枢—周辺の関係が改めて注目されるようになったのは、1970年代盛んになった従属理論においてであった。とりわけ1975年にターナー（Turner, L.）／アシュ（Ash, J.）がこの命題に立脚し、発展途上国等を既発展国ための「快楽提供周辺地」（pleasure periphery）と規定する試みを発表し、一躍知られるようになった（この点について詳しくは参考文献 e）。当時提唱されたスミス（Smith, V.）らの「ホスト・ゲスト」（hosts and guests）論も、基本的には同様な問題意識にたっている。ゲストすなわち観光客は主として欧米など既発展国からのものであり、ホストは発展が遅れた国（地域）をいうものである。（参考文献 v, cited in f, p.238）。

従属理論などのこうした観点からみると、国際的な周辺地ツーリズムは、一般的には、富裕な工業地域の多いツーリスト供給国と発展が遅れたルーラル地域の多い国との関係であり、しかもツーリズム業のコントロールと利得獲得は多くが前者のもとに行われるものである（e, p.2）。

もとよりこうした従属理論的立場からする中枢—周辺理論は、今日では妥当しなくなっている場面や状況がいくつかある。そうしたなか、ブラウン（Brown, F.）／ホール（Hall, D.）はいわば脱従属理論的立場をさらに進め、2000年、少なくともツーリズム上で直接的に問題となるものは、以上のような中枢—周辺の関係などではなく、ツーリストたちがその場所をどのような所として知覚もしくは認識（perception）するかにあるという主張を改めて提起した（参考文献 e）。ここではまず、こうしたブラウン／ホールの主張をレビューする。

1. 周辺地ツーリズムの成立根拠

ブラウン／ホールが言わんとするところは、ツーリストにとっては、訪れる場所が例えば静けさや自然豊富性、遺産の優秀性などツーリズム上で魅力のあるものかどうかが決定的問題になるということであるが、この場合、そうした知覚は、人により異なることが出発点である。例えば「静かさ」でも「静かで不活発な所」や「静かで退屈な所」という知覚もあれば、「静かでいい所」という知覚もある。ツーリズムとしては、周辺地であろうとなかろうと、その土地についてツーリストが良い知覚をもつかどうか根本的な点であり、ツーリズムの直接的課題はそうした知覚を促進し強化するところにある。ブラウン／ホールは「周辺地においてツーリズム隆盛の鍵となるものは、その土地についての知覚である」と言っている (e, p.3)。

こうした考え方にたてば、周辺地は、知覚のいかんにより意味が異なるものとなる。例えば平穏さや良き自然環境のある所として評価され、中枢に対して必ずしも劣位というものではなくなる。このことは、中枢と周辺では評価(基準)を別にする必要があることを意味する。これに対していえば、これまでの中枢一周辺論は周辺を中枢と同じ基準で評価するものであり、従属理論は中枢の基準を唯一として、それを周辺にも適用しているものといえることができる。しかし、周辺の生きる道は、そうした中枢の基準から脱却し、独自の基準で動くところにある。

しかし、こうした周辺の、例えば環境の良さといった基準は、あくまでも、一時的滞在者であり観光客であるツーリストのものであって、地元住民のそれと同じものではないことが多い。また、ツーリスト同士でも基準の異なることがある。これは結局、「ものは考えよう」という面がないではないが、ブラウン／ホールの言わんとするところは、まさにここにある。地元住民とツーリストでは自然環境についても考え方、つまり知覚・認識の基準が異なることが多いから、そこが周辺地ツーリズムの突破口になる。

このような考え方をブラウン／ホールは、逆説的な考え方とよんでいるが、ツーリズムとしては、これこそが本来の考え方というべきものである。約言していえば、ツーリストは地元住民とは異なる「見る目」、考え方、評価基準を持つものであること、少なくとも持ちうるものであること、それがツーリズムの出発点となる。そうでなければ、ツーリズムは成立しない。

というのは、一般にツーリズムは日常性からの脱却を主要な契機とする場合が多いから、観光地の環境等について、日常的に当該観光地のなかにいる地元住民と、そうではないツーリストとは、種々な点で「見る目」、考え方、評価基準が異なるであろうからである。これは、ツーリズムの成立根拠である。日常的には無価値のものでも、ツーリズム上は価値が生まれるのである。ツーリズムが地域再生に役立ちうる根源の1つである。

以上は、観光地の知覚といっても、根本的にはツーリストの立場からのそれであるが、今1つ、観光地住民の立場からのそれがある。この点に視点をおいたものとして、次に英国のウェールズ地方について地元の知覚の分析を試みたボッターリル (Botterill, D.) らの所論(参照文献b)を考察する。

2. ウェールズ地方の周辺地ツーリズム

ポッターリルらの所説の出発点になっているのは中枢一周辺の概念で、しかもウェールズ地方はこの概念上では周辺に位置づけられるものという認識（知覚）である。そうした認識を生み出している第一の直接的要因は、ウェールズ地方では観光客が少ないことである。

ウェールズはイングランド、スコットランドと並ぶ英国の3大構成要素をなす地方であるが、少なくとも1996年段階では、外国人観光客がイングランド、スコットランドとくらべてかなり少ない（図表1）。英国の大きな観光顧客国である米国では、ウェールズ地方はツーリズム上周辺地扱いとなっている（b, p.21）。端的にいえば、ロンドン=中枢、ウェールズ=周辺である。

図表1：英国3大地方の外国人旅行者数（1996年）

地 方	旅行者数 (千人)	宿泊数 (百万宿)	消費金額 (百万£)
イングランド	20,840	198.3	10,698
スコットランド	1,960	20.2	865
ウェールズ	740	5.2	203

出所：b, p.20.

これは、これまでのところ、何よりもウェールズの知名度が低く、イメージが弱いところに根源がある。これは、ポッターリルらによれば、特にウェールズのツーリズム関係者の努力不足に起因するところが大きい。ウェールズ地方自体が、少なくともこれまでのところ、周辺の状況にあったことにも起因する。特に農村地域で人口減少、人口高齢化現象がおき、交通手段などインフラの整備不良もあって孤立的地域が生まれている。

ウェールズ州の州都カーディフは、ポスト工業化政策が進展しており、カーディフ城などもある都市である。ウェールズ地方の中枢として機能すべきところであるが、その集客力が弱い。エディンバラの半分ほどである。カーディフはロンドンから特急列車で2時間ほどの所にある。このことが強みではなく弱みとなっているふしがある。

ウェールズ地方全体としては、それ故、周辺地ツーリズムで活路を開くことが1つの選択肢であるが、ウェールズ地方の場合、周辺地ツーリズムが生かされていない、というよりは、生かすことのできない状況もおきている。例えば、ウェールズ地方の北方、アイリッシュ海に面したライルは、海浜リゾート地として有名な所であったが、1970年代ごろから性格が変わってきた。もともと欧州では17世紀初頭から海水浴は、温泉などと同様に健康によいこととされ（海浴療法：クラソテラピー：cf. ㄥ, 30頁）、ライルでもそうした保養目的の海水浴客などが中心で、そうした客への宿泊施設やサービス施設等が中心となっていたが、1970年代ごろから都市的な娯楽施設等が増え、都市すなわち中枢地区の娯楽機能を果たすものと変わり、周辺ツーリズムの特色が失われている（w, pp.17-37）。

このことは他面において、中枢地区における文化的社会的経済的变化を反映するものであって、周辺地ツーリズムも中枢における変化の影響を免れることができないことを意味している。周辺地ツーリズムとしての特色が生かされていない一方、中枢に対抗できるようなものもない。悪しき中途半端的な位置を強いられている。これは今日、中枢に比較的近い周辺地が担わされ

ている矛盾の1つである。周辺地ツーリズムでも中枢地区に近いが故に、かえって周辺地ツーリズムとしての価値創造性が発揮できない一例である。

次に、本節の総括もかね、周辺地とは一般にどのような特徴をもち、周辺地ツーリズムとはどのようなものをいうのかなどについて、改めて考察しておきたい。

3. 周辺地ツーリズムの総括的考察

最近の周辺地論としては、2005年のホール (Hall, C. M.) / ボイド (Boyd, S.) の所論が注目される (参照文献m)。かれらは、中枢にしる周辺にしる、地域の力を決める根本的要素 (資本) をまず確定する必要があるとし、それは次の4者により決まるものとする。

①自然資源などの自然 (natural) 資本。②交通手段や工場・家屋などの人為的営為による (human-made) 資本 (人工物資本)。③その地域の住民たちのもつ技能や知識などの人的 (human) 資本。④その地域の住民たちのもつ社会的関係の広がりや強さである社会関係 (social) 資本 (ソーシャル・キャピタル)。

従って、中枢と周辺との違いは何よりもこれら4つの資本のあり方の違いとして説明されるが、このうえにたつて、周辺地の特徴として次の8点が提示されている。①政治的・経済的力が弱いこと。このため、最近ではグローバリゼーションや規制緩和などの影響を強く受けている。②中枢から地理的に遠距離にあるため、マーケティングなどでも不利になること。③農家等では自給性が比較的高いため、地域内部での経済的結び付きの程度が低く経済的波及効果が小さいこと。④人口流出傾向、教育機会の不充分性のため、人的資本、社会関係資本の蓄積が進まない傾向があること。⑤こうしたため、物事についての革新的傾向が弱く、例えば新製品や新ビジネスモデルの開発などが進まないこと。⑥経済的力の弱さのため、政治的にも弱くなり、補助金支給等を含め、政府などの介入が多くなり、自立性が弱くなる傾向があること。⑦情報の流れも弱く、種々な意味で中枢依存性が強くなる傾向があること。⑧以上のような遅れのため、古いものが残り、それが観光資源となりうること。

ホール/ボイドの以上の所論は、周辺地についての現段階での説明を代表しているものとみられるが、これによると、例えば周辺地ツーリズムとは何かという場合、それはかなり広い範囲のものとなる。この点についてホール/ボイドは、自然基盤ツーリズム (nature-based tourism) という観点からではあるが、特徴的には次の3種に大別されるものとしている (m, p.3)。①アドベンチャー・ツーリズムのような自然の力や状態などを利用するもの。②狩猟やダイビングなどのような自然成果の獲得や観賞に志向したもの。③エコツーリズムのように自然の保護や育成に志向したり、自然のなかで過ごすことに志向したりするもの。

これをみると、周辺地ツーリズムは、中枢—周辺の関係に立脚しつつも、結局、自然基盤性に特色を見出すものということになるが、そうしたなかでも、これをルーラル (農村) ツーリズムとして問題究明を試みているものを、次に考察する。

Ⅲ. 農村ツーリズム論

ここでいう農村ツーリズムとはrural tourismをいうが、以下でみるようにrural tourismは山村など原生的地域をも指す場合があり、以下ここでは農村ツーリズムとルーラルツーリズムという言葉の適宜使用することをお断りしておきたい。

ルーラルツーリズムについてまず述べておきたいことは、ルーラルツーリズムと周辺地ツーリズムとは概念的にどのように異なるのかが、必ずしも明確ではないことである。周辺地ツーリズムを中枢一周辺の概念でとらえると、中枢以外のものはすべて周辺となり、ルーラルツーリズムもこれに入る。従って以下でみるように、ルーラルツーリズムを中枢一周辺概念でとらえる考え方もあれば、ルーラルツーリズムとして独自分野があるという考え方もある。

ところで、ルーラルツーリズムが問題として意識されるようになったのは、EUの場合、概ね1960年代以降、特に1970年代になってからで、例えば自家用車が普及してルーラルツーリズムが盛んになったためである。ルーラルツーリズムの概念は、最初は、これを単に地理的にルーラル地域のものとしてとらえ、そうしたルーラル地域におけるツーリズム活動全体 (entire tourist activity in a rural area) をいうものであったが、1990年代になって、ルーラル地域は何よりも経済的、社会的、政治的な関連において規定されるべきものであることが主張され (u, p.4)、中枢の地区から離れた所というだけではなく、とりわけ人口減少と経済停滞の状態にある地域という見解が打ち出された。こうした中枢一周辺論的見解に基づき、ルーラルツーリズムはルーラル地域の商品化をもたらすものという考え方が強まり、今日ではそれが速度と規模において一段と高次の段階に達したといわれるようになった。

実は、EUでは、1992年に農業政策の転換が図られ、それまでは農業でも生産性向上が指針であったところ、製品多様化が主導原理とされた。いわゆるポスト・フォーディズムへの移行である。1996年以降にはそれがさらに高度化された。環境保護と両立した、農業以外のルーラル事業の開発・展開が叫ばれ、農家は何よりもルーラル企業者 (rural entrepreneur) たることが求められた。そこでは、それぞれの地域のアイデンティティの堅持、地域の内発的な推進力の発揮、環境保全が3大キーワードであったが (s, p.133)、農業だけに頼らないことがその重要な内容であった。

こうした動きは、統合的ルーラルツーリズムの推進として知られている (詳しくは参考文献γ)。そこでは地域の内発的要件と地域外の外発的要件との統合が主張されているが、すでに1994年ブラムウェル (Bramwell, B.) は、グローバル化の進行等を考えると、特定地域における特定ツーリズムというようなものは今日ではもはや存在しないのではないかと疑問を呈している (参考文献d, cited in u, p.4)。では、ルーラルツーリズムとはどのようなものをいうのか。西欧を対象にその特色や特徴を概観する。

1. ルーラルツーリズムとは何か

まず、ルーラルツーリズムの要件としては、レイン (Lane, B.) が1994年提示した次の5要件がよく知られている (参照文献 q, cited in u, p.9)。

- ①ルーラルツーリズムはルーラル地域に立地するものであること。
- ②機能的にルーラル的であること。これは、自然環境尊重や伝統的社会尊重などの観点にたつようなツーリズムであることをいう。
- ③経営規模においてルーラル的であること。つまり、一般的には小規模であること。
- ④地域立脚性を持ち、有機的で漸進的なものであり、地域的にコントロールされ、地域の長期的な繁栄のために行われるツーリズムであること。
- ⑤地域の環境・経済・歴史・立地条件等を総合した多様な性質をもつものであること。

ところが、これらの5要件について1997年、ページ (Page, S. J.) / ゲッツ (Getz, D.) は中樞一周辺理論やルーラルツーリズム企業の経営などを考えると、次のように拡大することが望ましいという主張を提起した (k, p.195)。

- ①ルーラルツーリズムの範囲は、農村的環境 (farmscape) にあるものという規定を拡大し、原生的地域 (wilderness) 等をも含むものとする。
- ②機能的にルーラル的であることは、ルーラルツーリズムの中心的命題として維持されるが、ルーラル的関連から離れていわば孤立的に存在するリゾート地等も、機能的にはルーラルツーリズムの一部をなすから、これらのものもルーラルツーリズムに含めるよう拡大する。
- ③経営規模については、企業は経済的に適正な規模であることが望ましいから、小規模性という規定は、必要な大きさの規模という規定に変更する。
- ④ルーラルツーリズム業が地域基盤性を持ち、地域との有機的関連のなかで進められるべきことは、いわば理想であり、実際にはその通りにならない場合があることを容認する。
- ⑤多様性はツーリズム企業においてこそ必要であるものとする。

これによれば、まず範囲において、ルーラルツーリズムは農村ツーリズム以外に原生的地域ツーリズムも含むものとなり、都市ツーリズム以外のものがすべて含まれるものとなる。その他の点では企業経営的観点がかなり強いものとなっており、EUにおけるルーラルツーリズムの変化・発展を強く反映したものとなっている。レインの5要件をルーラルツーリズムの狭義の要件というならば、ページ/ゲッツのそれは広義の要件といえることができる。

こうした点からみると、ルーラルツーリズムの概念規定としては、オPPERマン (Oppermann, M.) のそれがより妥当性をもつものとみられる (t, p.109: 図表2参照)。オPPERマンはまず、都市ツーリズム以外のものを、ルーラルツーリズムと原生的地域ツーリズムに分け、ルーラルツーリズムは農家ツーリズム (farm tourism) とそれ以外のルーラルツーリズム (non-farm tourism) に分けられるとしている。農家ツーリズムは農家に宿泊するものであり、それ以外のルーラルツーリズムは農村B/Bに宿泊するものや、農村において別荘生活をするものである。

ドイツにおける農家宿泊型ツーリズムと農村B/B宿泊型ツーリズムの大体の様子は図表3のごとくで、1997年当時では長期滞在的なものが

多い。これに従うと、ドイツの場合、ルーラルツーリズムは、一般的には、農村に比較的長期に滞在し、近辺を小旅行したり、農作業に関与したり、魚釣りなど種々なレクリエーション的活動を行うものということができる。

ルーラルツーリズム一般について経営・運営上の問題点としては、次の諸点がある (u, pp.20-27)。

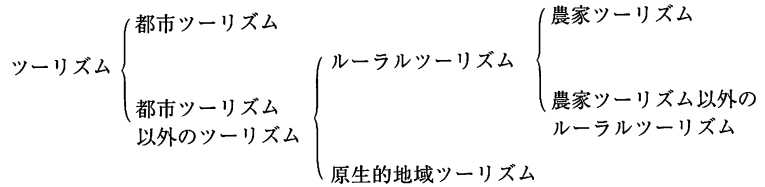
第1は、アクセス可能性と空間的諸要因である。ルーラルツーリズムとしては、一般的には、都市から近い所はあまり好まれないから、多少遠距離的な所が望ましいが、そうするとアクセス可能性が問題となる。空間的諸要因は純粋な農村的なものか、山岳や森林等を多く含むものか、河川や湖沼の状態はどうかといった問題である。関連して、途中や近辺のサービス機関 (店舗) の状態やツーリングルートの状況なども問題となるし、ドイツではロマンティック街道のあり方などが論究されている。要するに、環境破壊とならないような開発・進展が課題になる。

第2は、ツーリズム産業と当該地域の主要産業などとの統合的発展を図ることである。ルーラルツーリズムの統合的発展は、既述のように最近EUで推進されているものであるが、簡単な問題ではない。資源の使用用途について見解が分かれることが多いからであるが、一般的に言えば、長期的視点にたった資源の多重的使用 (multiple use) の観点が必要とされる。

第3は、ルーラルツーリズムでは季節性のあるもの (所) が多いことである。前記のドイツのルーラルツーリズムでも夏季が繁忙期となっている。夏季に休暇をとる人が多いからである。ウインター・スポーツ対象の場合では逆に冬季中心になる。繁忙期のみの期間限定的営業という策もあるが、年間を通じた営業の場合にはそれ相応の策を必要とする。

第4は、水道などインフラや公共財の確保・整備の問題である。これは前記の季節性と関連するところが多い。繁忙期と閑散期とでは、例えば道路の利用率が異なるから、埋没原価の問題がおきることが多く、インフラの整備で遅れることがある。

図表2：ツーリズムの構成シエーマ



出所：t, p.109.

図表3：ドイツのルーラルツーリズムの平均的状況

	農 家	農村B/B
これまでの営業年数 (年)	15	12
ベッド数 (ベッド)	6.7	5.4
年間利用率 (泊)	158	145
季節別利用率 (%) 1～3月	13	15
4～6月	49	43
7～9月	84	80
10～12月	21	17
宿泊客当たり滞在日数 (泊)	14	12
レピーターの割合 (%)	42	35
子供連れ宿泊客の割合 (%)	74	28
全所得に占めるツーリズム所得の割合 (%)	17	22

注：1997年オッパーマンの調査結果による平均値

出所：t, p.115.

第5は、十分な資金を確保し、安定的な財務状態を維持することが困難である場合が多いことである。この難点を打開するため公共的支援制度のとられることが多いが、公的サービスの縮小、企業民営化政策などがとられると、厳しい状況を強いられることになる。

第6は、労働力問題である。これも季節性に関連するところが多い。労働需要が季節的となり、その充足が難しい場合がある。その一方、ルーラルツーリズムは小規模で、家族的経営の場合が多く、ツーリズム業務は主婦によって担われることが多い。このことは主婦の労働過剰を惹起する一方、そのことの故に主婦の発言力強化をもたらす一面もある。全体としてはマーケティング等の専門能力に欠ける場合が多いから、この点からも協同化を進め、専門的スタッフの確保が必要になる。

第7は、ページ/ゲッツが「デザイン」とよんでいる問題で、家屋等の外観においてそれぞれの地域の伝統に根ざしたデザインがなされることである。ルーラルツーリズムは主として都市住民を対象とするものであり、都市ツーリズムよりもルーラルツーリズムを好む人たちが対象であるから、少なくとも都市や都市ツーリズムにないデザイン等を展開することが望まれる。ただし下記で述べるように、すべてにおいて旧来のままというのは今日では通らないであろう。

第8は、持続的発展 (sustainability) の原則を堅持することである。別稿ですでに指摘しているように (参照文献^ε)、ルーラルツーリズムも、単にコミュニティ基盤重視という観点だけでは人間 (個人、コミュニティ等を含む) の希望によりツーリズム進展が図られ、環境破壊になることがないではない。ルーラルツーリズムの根源的資源は自然であるから、自然環境保持と両立したツーリズムであることが必須の要件である。

以上の諸点は、ルーラルツーリズムの特徴を一般的に示したのものである。ルーラルツーリズムの根本的な要件あるいは特徴として提示されることの多い、当該地域独自のものを提供すべきだという点については、ページ/ゲッツの5要件でも消極的態度がとられているが、少なくとも今日では大いに熟考すべき点がある。次節で指摘しているように、ツーリストの普遍化現象が進行し、都市ツーリズムとルーラルツーリズムとの差異消滅が進んでいるとすれば、ルーラルツーリズムにおいて、デザイン以外の面においても、すなわち宿泊や飲食の内容・中身までも旧来の地方色のままで提供するというのは、あまり意義をもたないものとなる。

わが国でも地方のホテル等において、都市と変わらないものがけっこう隆盛をみている。これは根本的には、人間には個別性を求めるとともに普遍的なものを求める欲求があることに起因するが、顧客、観光客が求めるものには、質が高ければ共通のものでいいとする部分がある (a. p. 106)。ルーラルツーリズムではとにかくその地域独自なものを提供すればいいとするのは、安易な考え方である。

これは他方、ルーラルツーリズムでも専門的なものが必要になってくることを意味するが、ルーラルツーリズムでは、それが盛んになると、ツーリズム兼業農家のなかには、ツーリズム業からの所得の方が、本来のものである農業等の所得よりも多い、少なくともツーリズム業か

らの所得確保の方がより容易というケースがでてくる (u, p.13)。このため、ツーリズム兼業からツーリズム専業になるものも生まれてくる。農村B/Bなどにはこうして生まれたものもあるであろうが、この問題について農家におけるツーリズム兼業にたいする考え方を中心に英国の場合について分析し、英国では4つのタイプがあることを明らかにしたドメニコ (Domenico, M. D.) /ミラー (Miller, G.) の2007年の所説 (参照文献 i) を次にレビューしておきたい。

2. 農家のツーリズム兼業に対する4つのタイプ

ドメニコ/ミラーの出発点になっているのは、英国農家ではツーリズム兼業を含め、種々な形で兼業 (diversification, pluriactivity) がおきている、あるいは兼業をせざるをえない状況が進んでおり、農家にはいくつかの異なったタイプが生まれているということである。例えば1999年の調査によると、出稼ぎを含めて一切の副業 (兼業) 的収入なしで、自宅農業だけでやっていたのは38%にすぎない (i, p.22)。ルーラルツーリズムへの参加の形としては、ツーリストの宿泊、農業体験、農園解放、農園ショップなどがあるが、こうしたルーラルツーリズムに対する関与の考え方や態度について、英国のヨークシアと東部アングリアの個人経営農家を対象にして行われた実証的研究によると、4つのタイプのあることが認められた。

- ① 農業人たることに徹し、ルーラルツーリズムなどに関与したりすることを潔よしとはせず、その予定もない、あるいはその必要がないものたちである。農業専業型である。
- ② 現在のところはツーリズム兼業をしていないが、その必要性を感じ、可能性を模索しているものたちである。兼業予備軍型である。
- ③ すでに兼業を行っているが、できれば兼業をやめ、農業専業に戻りたいと思っているものたちである。農業専業復帰希望型 (modifier) である。
- ④ すでに兼業しているが、ツーリズム経営に重点をおき、農業は必要最小限のものに限っているものたちである。ツーリズムへの転向型 (switcher) である。

これをみると、英国では農業に誇りをもって従事する人たちが比較的多く、ツーリズム事業の兼業型でもそれをやむをえざるものと考えている人たちが多い。この点は、ツーリズム兼業を行っている人たちの間でも、農業への傾斜度の高い農業専業復帰希望型と、ツーリズムに活路を求めるツーリズムへの転向型とでは、例えば農作業体験事業でも仕方が異なっているところに現われている。ツーリズム転向型では、そうした場合実際の農作業とツーリスト用のそれとを区別しているものが多い。ツーリストの娯楽性や安全面や衛生面を重視しているからである。これに対し、農業専業復帰希望型ではそうした区別をせず、ツーリストにも実際の農作業をそのまま体験させるものが多い。本物・実物体験を重視しているのである。

なお、以上のように農村ツーリズムを農家兼業の問題として扱うのは農業学的アプローチであり、ツーリズム研究方向ではあくまでもツーリズムの1種として論じられるべきであるという見解があるが (l, p.93)、しかしルーラルツーリズムについての現場での担い手の分析は、い

うまでもなくツーリズム研究に不可欠なものである。本稿の問題意識からいえば、農村におけるツーリズム兼業の進展、ツーリズム専門的農家の出現は、ルーラルツーリズムの価値の現実化の過程として論究されるものであり、観光学研究は、こうした分野を含めた総合的分析たるものであることは多言を要しない。

次節では、ツーリズムの今1つの大きな分野である都市ツーリズムについて考察する。

IV. 都市ツーリズム論

都市ツーリズム (urban tourism) の特色は、なんといっても都市には多くの機能があり、ツーリズムはその1つに過ぎないところにある。都市には、例えば歴史的遺産や文化的観光資源等が多くあるが、それらは本来、宗教や文化的事業等のために設けられたもので、ツーリズム用にあるものではない。こうしたなかで、都市ツーリズムはどのように考えられてきたのか。まず、都市ツーリズムには4つのアプローチがあることを提示した2003年のアシュワース (Ashworth, G.) の論考 (参照文献 a) をレビューする。

1. 都市ツーリズム論の4類型

アシュワースは、都市ツーリズムの4類型を提示するにあたり、これまでにおける都市ツーリズムの位置づけについて総括的な見解を述べている。

それによると、そもそもこれまでのツーリズム研究ではすべての分野について研究がバランスよく行われてきたのではなく、アンバランスがあった。特に都市ツーリズムは軽視されてきた。都市ツーリズムのこうした軽視は、2つの方向から生まれてきた。1つは、ツーリズム (研究) 分野における都市ツーリズムの軽視である。今1つは、都市論・都市研究における都市ツーリズムの軽視である。

第1のツーリズム分野における都市ツーリズム軽視は、第2次世界大戦後の本格的なツーリズム研究の出発点の1つとなったところの、クリスタラー (Christaller, W.) のツーリズム立地論に起因するところが多い (参照文献 g, 詳しくは p153頁)。クリスタラーは経済立地論をツーリズム立地論にも適用し、例えば、海運業では港湾地区での立地を必要とするように、仕事は都市で行い、地方は休養・気晴らし・ツーリズムの場所という主張を提起した。すなわち、都市 = 仕事の場所、地方・田舎 = 仕事の疲れを癒すための休養・気晴らし・ツーリズムの場所というものである。そこで、ツーリズムは地方の問題であり、都市は仕事の場であって、ツーリズムの場所ではないというテーゼが生まれた。

今1つの都市研究等における都市ツーリズムの軽視は、3つほどの原因がある。第1に、都市には多くの機能があり、ツーリズムはメジャーの機能とは考えられなかったことである。第2に、その場合都市では文化や娯楽に重点がおかれ、宗教的歴史的建造物にしても、何よりも

宗教的あるいは文化的な意味においてとらえられ、ツーリズム的意義は認められることが少なかった。第3に、以上のために、都市の観光的学的研究は実際にも困難であった。

アシュワースによれば、かれが、例えば山岳ツーリズムや原生的地域ツーリズムと同じように、都市ツーリズムがあるのではないかと主張した論文を発表したのは1992年のことである(a, p.146)。これにこたえて、さしあたり提起されたのは文化都市ツーリズムや歴史都市ツーリズムといった内容のものであった。1995年にはページおよびロー (Law, C. M.) により同じ“*Urban Tourism*”というタイトルの書がそれぞれ刊行されているが、両書は、都市ツーリズムの分析・研究の書というよりは、都市の一般的な計画や運営の書というべきもので、都市ツーリズムはその一環という位置づけであった(a, p.147)。しかしこのことは、都市ツーリズムとは所詮そうしたものではないかということを示唆していた。こうしたこれまでの諸研究をまとめると、アシュワースによると、4つのアプローチに分けられる。

第1はツーリズム有用点アプローチ (facility approach) である。もともとはツーリズム上有意義な個所や地区について歴史的経緯の究明や地理的な説明などを行い、観光資源のツーリズム的案内を主旨とするものであるが、ツーリストに有用なホテルやレストラン等の紹介も含まれていた。そこで、都市におけるホテル立地問題の研究等が行われ、それぞれの都市のツーリズム収容力 (tourism carrying capacity) の研究分野まで進んだ。

この研究方向は概ね1980年代まで多くみられたものであるが、ウォール (Wall, G.) によると、収容力の概念はマルサスの人口論にまで遡り、レクリエーションについてであるが、今日的な形で提唱されたのは1936年のサムナー (Sumner, L.) の試みに始まる (y, p.190)。これに対してアシュワースは、ある都市のそうした収容力は、マネジメントのいかんにより異なるものであり、マネジメント問題抜きに考察するのは實際上無意義であり、こうした領域だけを切り離して論究するのは、都市ツーリズム論上意味がないと評している。

第2は生態論的アプローチ (ecological approach) で、ツーリズムを都市生態のなかでとらえようとするものである。その端的な例は歴史志向都市ツーリズムといわれるものであるが、商店街の生態論的研究に類似の都市ツーリズム研究に志向し、都市同士の比較的研究も可能になる。この研究方向が提唱されたのは1980年代中旬ごろで、当時はまだツーリズムを都市の計画・運営のなかでとらえるニュアンスが強かった。2000年代になってツーリズム (政策) 全体のなかで都市の役割を論じる方向のものも現われてきた (a, p.150)。

第3はユーザー志向アプローチ (user approach) である。これは、第1の立地志向性、第2の生態志向性に対して、ツーリストの行動に志向したもので、すでに1980年代後半におきている。例えば観光名所などでツーリストたちがどのような行動をするかなどを研究課題とするが、この方向では、少なくとも暗黙裡に多くの場合、都市ツーリズム (ツーリスト) は、例えば農村ツーリズム (ツーリスト) とは異なるものであることが前提になっている。

しかしこれに対して、アシュワースはそうしたツーリズム (ツーリスト) 上の区別は、少なく

とも現在では、あまり意味がないと批判している。かれによれば、こうしたツーリズム上の区別が意味ないばかりか、そもそもツーリズム上の行動・活動と、家庭等における日常的な行動・活動を区別することも意味がなくなっている。かれは「両者は異なるもののようにみえるが、欧米的な生活スタイルの観点からいえば、今や、日常生活はますますレジャー志向的になっており、休日は日常生活の延長であって、その対照物ではなくなっている。ツーリストは、自宅を離れた住民であり、住民は、旅行の狭間にあるツーリストである」(a, p.152)と述べ、さらに、今日では多くのツーリストたちは「経済的、社会的あるいは文化的な発展の点でほとんど差異のない所の間を行き来するもの」(a, p.146)であると規定している。

第4は政策アプローチ (policy approach) である。都市のツーリズム政策に重点をおくものであるが、アシュワースによると、西欧の場合、最近まで多くの都市ではツーリズム政策はなかった。ロンドン等は好例であるが、そうした政策を特に必要とすることも少なかった。多くの場合、都市における観光資源はいわば昔からあったものであり、ツーリズム用として特に整備することなどを必要とするものではなく、ツーリストとのトラブルもなかった。精々ケース・バイ・ケースで対応すればいいものであった。

しかし最近では、都市でも、ツーリストあるいはツーリズムは資源に只乗りするもので、環境の汚染や破壊をもたらしかねないものとしてとらえられ、ツーリズムの計画化・マネジメントが問題として登場してきている。都市ツーリズムについても持続的発展が唱えられている。しかしこの点に対しても、アシュワースは批判的で、いわれているような持続的発展は多くの場合、資源ベースの持続的発展についての同意なしに、関係者全員の利益になるような状態 (state of profitable harmony) を作ることに終わっているのではないかと述べている (a, p.155)。

これまでに都市ツーリズム論の4類型、それに対するアシュワースのコメントは、大要以上である。そのうえにたってアシュワースは、当初の問題意識である都市ツーリズムの軽視という点について、最後に次のような結論的主張を行っている。すなわち一般的にいえば、ツーリズムにとって都市は重要な地位を占めるが、しかし都市ではツーリズムは必ずしも重要なものではない。都市にはツーリズム以外に多くの本来的機能があり、土地・資本・労働力についてツーリズム以外に使用されるべき用途があるからである。従って都市ツーリズムに対し多くの研究がなされず、アンバランスがあってもやむをえないものである、と (a, p.158)。

以上のアシュワースの所論では、それにとどまらず、そもそも現代ツーリズム全体に対して消極的見解となるものを含んでいることが注目される。このことは端的には、上記の第3点、すなわち、今日ではツーリストと(地元住民らの)非ツーリストとは区別する意味がないという主張にみられる。これに基づけば今日のツーリズムは多くが意味を持たないものとなる。そういう意味では、これは都市ツーリズムの否定論であるばかりか、ツーリズム全体の否定論でもある。この点に対する反論としてここでは、同じく再帰的近代化の観点からツーリストと非ツーリストとの差異消滅 (de-differentiation) を主張している、本稿冒頭で紹介したアリーのこ

の点に関する見解を紹介しておきたい。アーリは、最近の1994年（reprint, 2002年）の著においても、こうしたツーリストと非ツーリストとの差異消滅を主張しつつも、しかし他方では、各ツーリストにおいて個別的選択（choice）の要望が強くなっていること、それに照応したオルターナティブ・ツーリズム（alternative tourism）論やその取り組みが盛んになっていること、そしてその必要があることを充分認めている（p. pp.273-275）。これからみると、アシュワースの見解は一面的で、こうした個別化の側面があることの認識が不十分であると思われる。

次に、以上のようなアシュワースの所論では批判の対象となった旧来の都市ツーリズム論がどのようなものであったかを見るために、その一例として直接的には西欧を対象に都市ツーリズムについて積極的に論じたヤンセン＝フェアベケ（Jansen-Verbeke, M.）／リーボワ（Lievouis, E.）の1999年の論考（参照文献n）を考察しておきたい。

2. 都市観光スポットの形態・機能分析論

ヤンセン＝フェアベケらの試みは、EUの都市ツーリズム政策を背景に、オランダ・ルーベン市における実証的研究に基づくものである。

EUでは、すでに1989～93年に「都市パイロットプロジェクト研究」（Urban Pilot Project）が行われている。当初は、歴史的遺産の（例えば戦争による破壊からの）復興を主たる目的とするものであったが、1997年に「ヨーロッパ都市ツーリズム」という名のワーキンググループができ、都市全体の再生や都市ツーリズムの育成などを含めた総合的な展開を目指すものとなった。それは、ツーリズムによる都市の再生・活性化を根本的柱とし、次の3点を具体的指針とするものであった（n, p.82）。

第1に、歴史的遺産を都市ツーリズム製品（urban tourist products）に組み込むこと。第2に、ヨーロッパ諸都市の文化的アイデンティティを確保し強化すること。第3に、ツーリズムを都市システムに統合させることによって、ツーリズムを含めた都市活動の質の管理を強化することである。

ヤンセン＝フェアベケらの所論は、こうしたEUにおける取り組みに立脚するものであるが、まず、次の4点に対処することが直接的な目標であった。第1に、近年におけるツーリズム・レジャー活動では、短時間（期間）集中的傾向が進み、ツーリズム活動用時間とツーリズム先（空間）の選定において変化がおきていること。第2に、歴史的遺産などの見直しがおき、併せてショッピングや娯楽面からも都市の魅力について評価が高まっていること。第3に、その場合、歴史的遺産等についてもツーリズム化（touristification）が必然的であり、それを是認したうえで、都市の多機能性と経済的活性化を視点に入れて、都市の全体的バランスを崩さない形で、都市ツーリズムの発展を図るべきこと。第4に、ただしその場合、都市の環境悪化をもたらさないことである。

これからもわかるように、ヤンセン＝フェアベケらの基本的視点は、一言でいえば、都市環

境の持続的維持・発展を根本としつつも、都市のツーリズム化傾向を必然的なものとして認め、都市に存在する歴史的遺産等と都市ツーリズムとの共存 (symbiosis) を図り、文化とツーリズムとの間でシナジー効果を発揮させることである。

このように都市ツーリズムを歴史的文化的ツーリズムとした場合、顧客すなわちツーリストは、時間と訪問先(空間)との関連でみると、次の3者(セグメント)に分かれるものとされる。①歴史的文化的なものへの訪問を主たる目的とし、特定の訪問先でじっくり時間を過ごすもの。いわば歴史的文化的なものの探究型である。②歴史的文化的なものに関心はあるが、特定のものや事柄について探究するよりも、できる限り多くのものを観て廻ろうとするもの。1か所にじっくり居るのではなく、広く観て廻る型である。③海浜や山へ行く代わりにたまたまその都市に來ただけで、都市にある歴史的文化的なものについてもたまたま來ただけのもの。訪問先に特にこだわらず、持てる時間を過ごすだけの型である。

他方において、観光スポットとなる歴史的文化的資源についても、都市ツーリズムの観点からこれを分類し区分することが必要になる。その場合区分の観点とされたものは、形態上の位置づけ (morphological positioning) と当該都市ツーリズム上での機能 (functionality) である。ただしそれは、それぞれの資源の持続的保持を土台とするものである。

前者の形態上の位置づけは、個々の資源について歴史的または文化的な意義を土台としつつも、主として地理的にその資源が孤立的存在であるのか、いくつかの資源の複合的な存在であるかを問うもので、複合性いかんは歩ける距離にあることが基準とされている。後者の都市ツーリズム上の機能は、当該資源へのアクセス性の程度や資源の役割などが基準とされている。両者は相互に関連あるものとされ、形態上でも機能上でもランクの高いものがツーリズム上において価値が高いものとされている。

この場合注目されるべきことは、ヤンセン=フェアベケらによると、歴史的文化的意義はコンセンサスを得るのが困難であるとして、都市ツーリズム上は所与のものとしてされていることである。そこで、結局、形態上でも機能上でも複合的なものが高ランク、孤立的なものは低ランクとなるが、これには根拠がある。それは、種々な調査によると、都市ツーリスト、特に量的中心になる広く観て廻る型では、アクセスが良くなく孤立的な所には、行ってみたいという希望をもってやって来るが、実際には訪問しないで帰ることが多いことである。

以上の形態的位置づけと都市ツーリズム的機能に基づいて観光スポットを位置づける作業が、ルーベン市について行われ、その図面的なものが示されているが、これらを見ると、歴史的文化的資源を中心にした都市ツーリズムでは、結局、次の3点が中心的問題となる。①観光スポットの複合性(クラスター性)、②他の都市機能とのシナジー性、③観光スポット自体の魅力・誘因力。

ヤンセン=フェアベケらの所論は大要以上であるが、それは、歴史的文化的資源と都市ツーリズムとの共存を根本におきつつも、都市ツーリズムの発展、および、歴史的文化的資源のツ

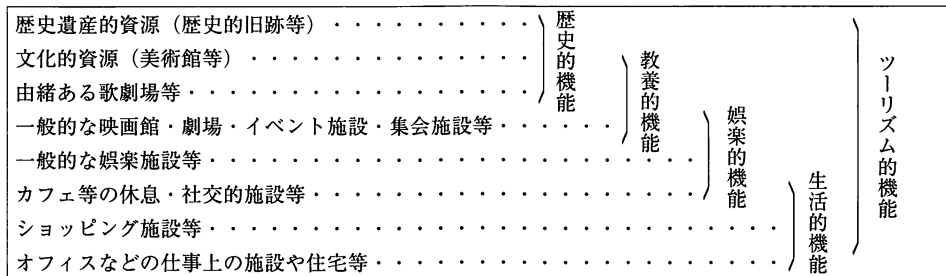
ーリズム化の必然性を説くことに比較的焦点があるものと解される。都市ツーリズム論としてはやむをえざる見地であるが、しかしかれらは、それはあくまでも持続可能性を前提にしたものであり、そのことは今日、ツーリズムを都市発展の刺激剤として位置づける際の最も重要な原則であると強調している (n.p.104)。

次に、都市と都市ツーリズムの特性について総括的な考察を行っておきたい。

3. 都市の性格の違いについて—都市ツーリズムのまとめに代えて

ヤンセン＝フェアベケらの所論は、都市ツーリズムのなかでも歴史的文化的資源の多い都市を前提にしたものであるが、都市の機能は本節冒頭で一言したようにいくつかある。ツーリズムの観点からみて都市機能にはどのようなものがあるかについては、アシュワースのまとめが参考になる。それを私見により一部修正したものが図表4である。

図表4：都市機能（都市資源）



出所：a, p.146.

都市ツーリズムは、西欧では近年隆盛の方向にある (r, p.100)。都市の魅力が改めて高まり、観光価値が向上しつつあるからである。西欧の場合、都市の魅力が高まっているのは、ひとつには、観光客側においてツーリズムの短期集中型が進んでいることである。オーストラリアのドゥイヤー (Dwyer, L.) らも近年では仕事の仕方が変わって、短期間の休暇を年に複数回とする者 (multiple holiday taking) が増えていると指摘している (h, p.70)。

さらに、社会のビジュアル化が進み、美的観志向性 (aestheticization) が強まっていることも起因の1つである。これは、再帰的近代化論の立場からラッシュ (Lash, S.) /アーリが近著で美的再帰化 (aesthetic reflexivity) の進展として論じているものである (p, pp.4-5)。かれらのいう組織された資本主義 (organized capitalism) から組織揺らぎの資本主義 (disorganized capitalism) への移行を基盤にして (参照文献 z, α)、人間の個人化が進み、人間の美的追求志向性も開花したというのがそのエッセンスである。ただしここでいう美的追求志向性はかなり広い意味のもので、例えば本物・実物志向 (authenticity) を含んだものである。

再帰的近代化の過程において個人の土地拘束性も弱まる。人間の流動化、可動性 (mobility) が強まり、人間の土地従属性は弱まる。これは埋め込み離れ (disembedding, emptying out) とい

われるが、アシュワースらのいう「ツーリストと地元住民との区別消滅」はこの流れのなかのものであり、アシュワースが都市ツーリズムのみを特別に論じる価値は少ないというのもこの流れのうえのものである。

いずれにしろ、このような需要(者)サイドの動きに都市がより適合していることが、都市ツーリズムの隆盛をもたらしているが、現代における都市ツーリズムの動向を考える場合、当然ながらそれぞれの都市の性格の違いが重要なポイントとなる。前掲の図表4によれば、歴史遺産の多い都市、近代的文化的施設の多い都市、娯楽面で充実している都市、ショッピング上魅力ある都市といった区別ができるが、いずれにしろ、社会的な環境あるいは雰囲気の良い都市かどうか前提になる。この点、特に都市の活性度は、結局、それぞれの都市の実質的中核となってきた産業によりかなりの程度規定されるところがある。こうした観点からラッシュ／アーリは今日の都市を次の3者に区別している (p. pp.151-152)。

第1は、旧来その都市で中核的役割を担ってきた旧来工業が衰退し、その代替策がとられないまま活力を失っている「工業衰退化都市」(de-industrialized city)で、例えば「さび地帯」(rustbelt)といわれる米国鉄鋼業衰退地帯である。第2は、衰退工業からの脱却・移行が成功裏に行われた「再生成功都市」(restructured city)でニューヨークやロンドンなどはこれに入るといわれる。第3は、旧来工業がもともと大きな割合を占めないまま、その後新産業の発展などにより成長を遂げている「ポスト工業化都市」(post-industrial city)で、その代表例は米国のヒューストンなどの南部の「サンベルト」(sunbelt)といわれる諸都市である。

これらはそれぞれの都市のツーリズム発展上重要な点であるが、都市ツーリズムの基本的特性としては、やはり今日における美的観志向性が重要なポイントとなる。このことは原理的には周辺地ツーリズムや農村ツーリズムにも妥当する。

V. あとがき—観光の価値創造性についての補足

観光とは何かについて、観光の語源から考えて「国の光を観る」という考え方、ヘドニズム的な快楽追求という考え方、あるいはエウダイモニア主義的な文化・教養追求的な考え方などがあるが(参照文献④)、観光を地域振興・社会発展の立場から位置づける考え方では、観光には価値を創造する力があるものと把握することが重要である。この点についての要点は本稿冒頭で述べている通りであるが、ここでは、次の諸点を補足的に述べ、まとめとさせていただく。

まず第1に、特に周辺地の場合、それまで遅れた存在であることが価値を生むことである。これは、大都会など中枢地では失われている、人間意識上価値あるものが周辺地には残されているためである。従って、周辺地にあるものでも人間意識上価値あるものでないと、観光上の価値は生じない。ただし、こうした価値向上は、今日ではかなりの程度、本物・実物志向、美的観志向性に依存している。

第2に、そうした周辺地にあるものでも、その後人為的な営為が加えられ、観光上価値が生まれるもの、または価値が向上するものもある。例えば景観のすぐれた高山に登山道やケーブルカーが設置されたりすることである。ただし、それによって本来の景観等が損なわれると、逆効果となり、人為的営為はマイナス作用のものとなる。今日では従って環境の持続的維持が主導原理になる。

第3に、観光の価値創造性は、観光目的である観光資源だけではなく、関連する交通手段や宿泊・飲食施設などの構成要素でもそれ相当の形と程度において現れる。これは観光のシステム性に由来するが、観光客満足は、別稿で論じているように（参考文献δ）、当該観光行為全体についても成立するし（全体的満足）、個々の構成要素ごとにも成立し（構成要素満足）、当該観光地へのロイヤルティ（忠誠心）向上策となりうるが、観光の価値創造性は、とにかく観光の全局面で生まれる。観光が地域再生の有力な手段となりうるゆえである。

第4に、観光で生まれる価値は、いうまでもなく交換価値である。交換価値が生まれたり、増えたりするのは、観光資源について「見る目」、すなわち価値評価に違いがあるためであるが、それは根本的には日常性の違いからくる。そして、それを現実化するものは観光（業）である。この意味において観光業は価値創造的産業である。

【参考文献】

- a : Ashworth, G., Urban Tourism: Still an Imbalance in Attention? In: Cooper, C. (ed.), *Classic Reviews in Tourism*, Clevedon: Channel View Publications, 2003, pp.143-163.
- b : Botterill, D./Owen, R. E./Emanuel, L. /Foster, N. /Gale, T. /Nelson, C. /Selby, M., Perceptions from the Periphery: The Experience of Wales, in: Brown, F. /Hall, D. (eds.), *Tourism in Peripheral Areas*, Clevedon: Channel View Publications, 2000, pp.7-38.
- c : Boyne, S./Hall, D. /Gallagher, C., The Fall and Rise of Peripherality: Tourism and Restructuring on Bute, in: Brown/Hall (eds.), *Tourism in Peripheral Areas*, pp.101-113.
- d : Bramwell, B., Rural Tourism and Sustainable Rural Tourism, *Journal of Sustainable Tourism*, 1994, Vol.2, pp.1-6.
- e : Brown, F./Hall, D., Introduction: The Paradox of Peripherality, in: Brown /Hall (eds.), *Tourism in Peripheral Areas*, pp.1-6.
- f : Chamber D., An Agenda for Cutting-Edge Research in Tourism, in: Tribe, J./Airey, D. (eds.), *Developments in Tourism Research*, Amsterdam: Elsevier, 2007, pp.233-245.
- g : Christaller, W., Beiträge zu einer Geographie des Fremdenverkehrs, *Erkunde*, 1955, Bd.9, Februar, SS.1-19.
- h : Dwyer, L./Edwards, D./Mistilis, N. /Roman, C./Scott, N., Destination and Enterprise Management for a Tourism Future, *Tourism Management*, 2009, Vol.30, pp.63-74.
- i : Domenico, M. D./Miller, G., Are Plastic Cows the Future for Farming? Implications of an Alternative Diversification Model, in: Tribe/Airey (eds.), *Developments in Tourism Research*, pp.21-32.
- j : Fyall, A./Callod, C./Edwards, B., Relationship Marketing: The Challenge for Destinations, *Annals of Tourism Research*, 2003, Vol.30, pp.644-659.
- k : Getz, D./Page, S. J., Conclusions and Implications for Rural Business Development, in: Page, S. J./Getz,

- D. (eds.), *The Business of Rural Tourism: International Perspectives*, London: International Thomson Business Press, 1997, pp.191-205.
- l : Gladstone, J./Morris, A., Farm Accommodation and Agricultural Heritage in Orkney, in: Brown/Hall (eds.), *Tourism in Peripheral Areas*, pp.91-100.
- m : Hall, C. M./Boyd, S., Nature-based Tourism in Peripheral Areas: Introduction, in: Hall, C. M./ Boyd, S. (eds.), *Nature-based Tourism in Peripheral Areas*, Clevedon: Channel View Publications, 2005, pp.3-17.
- n : Jansen-Verbeke, M. /Liebois, E., Analysing Heritage Resources for Urban Tourism in European Cities, in: Pearce D. G./Butler R. W., *Contemporary Issues in Tourism Development*, London: Routledge, 1999, pp.81-107.
- o : Kim, W. C./Maubornge, R., Value Innovation: The Strategic Logic of High Growth, *Harvard Business Review*, 1997, January/February, pp.103-112.
- p : Lash, S./Urry, J., *Economies of Signs and Space*, London: Sage, 1994 (reprint, 2002).
- q : Lane, B., What is Rural Tourism? *Journal of Sustainable Tourism*, 1994, Vol.2, pp.7-21.
- r : Mihalić, T., Tourism and Economic Development Issues, in: Sharpley, R./Telfer, D. J. (eds.), *Tourism and Development: Concepts and Issues*, Clevedon: Channel View Publications, 2002 (reprint, 2007), pp.81-111.
- s : Nilsson, P. Å., Tourism's Role in New Rural Policy for Peripheral Areas: The Case of Arjeplog, in: Brown/Hall (eds.), *Tourism in Peripheral Areas*, pp.133-151.
- t : Oppermann, M., Rural Tourism in Germany: Farm and Rural Tourism Operators, in: Page/Getz (eds.), *The Business of Rural Tourism: International Perspectives*, pp.108-119.
- u : Page, S. J./Getz, D., The Business of Rural Tourism: International Perspectives, in: Page/Getz (eds.), *The Business of Rural Tourism: International Perspectives*, pp.3-37.
- v : Smith, V. (ed.), *Hosts and Guests : The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1977.
- w : Urry, J., *The Tourist Gaze*, 2nd ed. London: Sage. 2002 (reprint, 2009; 1st ed., 1990).
- x : Urry, J., The Sociology of Tourism, in: Cooper, C. (ed.), *Classic Reviews in Tourism*, pp.9-21.
- y : Wall, G., Cycles and Capacity: Incipient Theory or Conceptual Contradiction? *Tourism Management*, 1982, September, pp.188-192.
- z : 大橋昭一「組織された資本主義から組織揺らぎの資本主義へ—再帰的近代化の経営学への一過程—(1)、(2)」『関西大学・商学論集』1999年第44巻第5号(51-69頁)、2000年第44巻第6号(1-20頁)
- α : 大橋昭一「再帰的近代化の理論の概要—再帰的近代化の経営学のためのテーゼ—」『関西大学・商学論集』2002年第47巻第4・5合併号、17-34頁
- β : 大橋昭一/渡辺朗『サービスと観光の経営学』同文館、2001年
- γ : 大橋昭一「コミュニティ基盤観光経営理論の諸類型—観光地コラボレーション理論の形成—」『和歌山大学観光学部・観光学』第1号、2009年5月、1-13頁
- δ : 大橋昭一「最近における観光客満足理論の諸類型—観光経営理論の基本概念の考察—」『関西大学・商学論集』第54巻第1号、2009年4月、67-86頁
- ε : 大橋昭一「現段階における観光の社会経済的意義と発展動向—産業としての観光業の特徴についての国際的論調の考察—」『関西大学・商学論集』第54巻第2号、2009年6月刊
- ζ : 大橋昭一「観光地ライフサイクル論の進展過程」『和歌山大学観光学部設置記念論集』2009年3月、23-37頁